

横谷峽 乙女滝の伝説

豊科パークホテルから徒歩7〜8分のところに名勝「乙女滝」があります。約4キロの横谷峽トレッキングコースの始(終)点となっております。この乙女滝は縁結びの滝または養老の滝ともいわれ、その由縁は一人の乙女にまつわる伝説に由来しております。ぜひ、お訪ねください。

むかし、この地方に名主という権力を持った名門の家があり、大勢の召使を使っていた。その頃は今と違って、名主様といえれば家族と使用人の隔りは天と地ほど違っていて、使用人は名主の顔を正面から見る事は出来ないほどの違いがあり、何か召使に間違いがあればお手打になっても文句はいえないくらいの時代であった。

さて、これから本題にはいるが、こうした時代の物語であります。今から幾百年も昔、地方に土地や山林を多く持って、家で作れない大部分の広い田畑は小作人に貸し、年末になれば年貢米を入れる米蔵や金蔵が幾戸まもある財産家の名主があった。この名主の家に二十歳近い長男があり、この人は大変温厚で性格がよく、使用人にも常に親切で又名主の家柄というような顔をされた事もなく、実に良く出来た青年で、地方の信望も厚い人柄の息子がいた。又親の名門閥というものを何よりも大切に考えている人物で、召使の人達は

「で、
ことも

「そして
十六、
男の

「七歳になる女中がいた。大勢の使用人の中でも特に目につくような人の御手伝いをしていた。又この名主の息子は幼い頃より寺子屋へかよい、勉強好きで沢山の番物があつたので乙女はこの本を借りて見る事が唯一の楽しみで、息子の部屋へ行く事が多くなつた。その内に二人の仲は何時しか心が通じ合い、愛の芽が生え始めたが、乙女はとても叶わぬ恋なので、これ以上深くなつてはいけなさと自分を戒め、なるべく息子と会うのを遠ざけていた。しかし一度芽生えた芽は去り難く、愛は恋となり、人目を忍んでいても深くなる恋の道、内輪の人達が気付かぬはずはない。又世間は世間で針を大もちにしようように噂は噂を呼んだので、さあ大変、遂に名主の知るところとなつた。名主は目を赤くして憤り、不義密通は御家の禁物である、大した事を仕出かしたと、早速女中頭を呼び出した。女中頭もいよいよ来るものが来たとおずおず名主の前に出れば、名主の憤りは峠を越えたか、声ももどかしくお前の監督を責めるわけではないが世間に対し面目もない。即座に乙女を呼んで暇を出すよう、普通になれば手打ちに致すところであるが、日頃は好々働いてくれたのでその心に免じて手打ちにしないので、その訳を本人に良く伝え、ただしこの土地に二度と顔をを見せぬように申しつけると命じた。又件をも呼んで固く言い聞かせ、二度と家門を穢すような事をしないよう、今後又も彼様な事が続けば女は手打ちに致し、貴様は勘当致すので覚悟するようにと厳しく言渡し、ひとまずこの事件はかたついた。

しかし川の水を一旦止めたと同じで、水が増せば堤は切れ、その時の水は前の数十倍の勢で流れる。二人の恋も同じこと、尚も一層烈しく燃え揚げり、行えぬ知れぬ恋の道とはこの事。さりとて今度主人に知れたならお手打ちになるは必然のこと、何んとか好い道はないものかと思案を重ねた末に、そうだ困る時の神頼みとはこの事と考へたのは、横谷峽の入口にある滝の御不動様はほんどつにあらたかな神様で、その滝の水で身を清め祈願をこめれば必ず願いを達する事が出来るという話を聞いた事を思い出した。そこで人の目につかぬよう万物みな眠った真夜中に心をこめて来て見れば、幾丈となく吹立つ滝飛沫に思わずからだは包まれた。こうこうと響く滝の音は我身も心も何も無く、只々無我の境に入り、素裸となつて幾回かしぶきを潜り、身を清め、斎戒沐浴、一年に神に願を叶え賜えと手を合わせ、三千七百二十一日の願をかけた。それから来る夜も来る夜も草木も眠る真夜中に、時には雨の夜も、こわさを忘れて一年に岩をも通せと通い続けた。

そして満願の二十一日目の夜、これが最後と素裸となつて身を清めんと滝の下に佇めば、どうどうとあがる滝の白しぶきに包まれてかすかに見える乙女の姿こそ天女のように見えたのか、我を忘れてこの願い叶え賜えと手を合わせ、真心こめて念じに念じた。その時に、この真夜中に不思議にも滝の彼方に白髪の老人が現れて、こちらへ向かつて「汝、乙女よ良く聞けよ、そなたの真心は神に通じたので二人の恋を叶えてくれるぞよ。しかし人には人の道がある、この道を守り行くのはなかなか用意ならざる道にして、谷あり川あり、茨あり、雨や嵐を乗り越えて如何なる物にも耐え忍び、真心一途に進むが人の道、この心得を守り誓うなれば」との御諭しがあった。乙女はその場に平伏して「必ず誓って守ります」と申し上げれば、白髪の老人は再び口を開いて「人間の一生は青竹の如くにして如何なる風雪にも耐え忍び、常に正しく真つすくに伸び、やがては世の為になる、これが真の人の道、